

## 21. 上藻の開拓

### 新田 鶴一

※明治35年1月26日生、愛媛県出身。  
母ムラ。

#### 女の開拓者

私たちが北海道に移住する以前は、郷里愛媛県で、残されていた丘陵地帯の開拓に従事していたが、此所は小作地で、鰍下3年という制度であった。

※鰍下とは、開墾初めの一期間、小作料を免除することを言う。

此所は内地で残されていた土地丈けに、酸性が強く、甘藷は良くできたが、麦類が穫れず、生活は少しも良くならなかった。

母は、私が2才の時から寡婦で、此所の開拓に従事し、一時宮崎県に移住を決意していた。そのころ、母の柿の長男である高木栄太郎が団体を組み、北海道へ渡ることになったので、母もこれに加わったのだ。

大正2年4月、一行は剣淵に一先ず落ち着き、ここで団体を組んで、入殖地を求めることになったが、高木は、余り学問がなく、団体結成の手続き等も出来なかったので、上藻に特定地のあるのを知り、ここに個人入殖が定まったのだ。

その年の8月に、母たちは小屋掛けに上藻に入ったが、高木等と現地で入殖をきめる「くじ引き」をして、公平な土地割当が定まった。高木は責任者だったから、自分の好む処へ入地できたのだが、そう言う事はしなかったのである。

入殖時の密林は、現在どこへ行っても見ることのできない立派なものだったが、開拓者には、どうやって開くか大きな脅威だった。

気丈な母も流石に恐れをなして、土地を売って引き揚げると言い出した。私は子供だったが、北海道まで来て、荒地ぐらい開かねば来た甲斐がないと言ったら、それから母は、一言も愚痴を言わず開拓に従事した。

私は今でも、あんな事を言わず、母の思いどおりにしたなら、あの血の沁むような開拓の苦勞をさせなかったものと、胸に刺さるような思いがしてならない。

上藻への入殖は、大正2年11月23日で、家族は、母と姉（13才）と私（11才）の三人だった。この年は全道的な大凶作で、剣淵で3町ほど作付したソバは、8月の降雹と霜害で全滅に近く、畑の耕し賃と種子代にも足らず、無一文に近い状態で入殖した。

私たちが上藻へ入った道路は、いまの高橋寿男さんの下から、旧道掘割附近に登り、左側の峯伝いに中藻の分れ道附近に降りる、急な踏み分け道であった。

七重に一泊して、翌朝出発したが、僅かの家財道具を背負って、上藻に着いたのは夕方であった。私は剣淵で「すげ」で草履を作り、これを履いて来たが、大沢秀雄さん附近で切れてしまい、それから裸足で歩いた辛さは忘れられない。

団体で入る予定だった11戸は、高木栄太郎、大沢菊蔵、伊藤菊平、大沢只吉と私たちは、その年一緒に入地し、石川儀平、浮田京太は、翌3年に入地して、残り的人たちは遂に入地しなかった。

上藻の造材は、私たちの入殖した年の冬から始まり、小林弥三郎さん等の三和木材が、開拓地内の良材を伐り出して流送したので、私たちも良材を全部売り払った。

開拓地内の立木を、造材師に伐採してもらい、残された大木は、その頃枝下しを専門にやる職人のような人がおり、これに頼んで枝を下し、幹に鋸目を入れて皮を剥ぎ、立ち枯れにした。伐った枝は集めて燃し、太いものはそのまま腐るのを待ったのだ。

焼き払った後に、菜種やソバのバラ蒔や、すじだけ切って植付し、その傍ら開墾した。

あの密林は、男でも手余ししたのに、女子供が何とか開拓できたのは、造材師に大木を伐ってもらったお蔭げである。

大正6年に高木たちは、成功検査を受けた土地を、中野直喜さん等に売って、内地に引き揚げ、残されたのは、浮田さんと私たちだけで、流石の母も、頼る人たちに去られてショックだった。私たちは成功検査を受けておらず、どうにもならなかったのである。

それからの母は、今まで以上に開墾に力を入れ、人に負けまいと頑張った。私たちが今日の生活ができるのも、母に従って努力した為めで再婚もせず、女の手一つで未開の荒地に挑んだ母を思うとき、どんなに辛かったかと、心から感謝せずにはおられない。

私は、父がいないため、子供心にも母の苦労や、開拓の辛い毎日を、しっかりと胸に刻みつけていた。

北海道の荒野に、2人の子供を連れた女が開拓に従事し、何とか成し遂げたということは、余り例がないだろうと思っており、それだけ有難い気持ちで一杯である。

#### 米作りと土功組合計画

大正8、9年ころになると、この地方にも水田熱が高まり、内地同様に米がとれるということは、開拓者の夢でもあった。

大正10年に、13号沢の星加数太郎（勘助父）さんと相談して、二人でそれぞれ5畝ほど作り、良く出来たので翌年は3反ほどに増やし、これも豊作だったので気を良くして、逐次造田をして行った。水田作りは、上藻では私たちが最初だったと思う。

その中に多くの人が手掛け、昭和2年ころに大原兵三郎、前沢清次郎さん等と相談し、土功組合を作ろうと、名寄から帰山と言う測量士に来てもらって、26号から10号近くまでの灌漑溝の開さくを図面に落してもらった。

しかし2里近い距離になる大工事なので、話は一向に進まず、遂にそのままになって終わったのである。その後は、冷害凶作が続いたので、この計画が実現しなかったのは幸いと言うべきで、もし実現していたなら奥興部同様に、悲惨な目に逢うところだった。

それでも上藻では多くの人が水田を作り、私も12号沢の水利権をとったが、願書提出の方法などは、母が旭川まで行って調べ、提出の図面は、土功組合計画のものを使用した。

12号沢からの水路や、近藤軍之助さんが、遠藤さんの沢から水を逆に、5号の方に引き揚げた水路も、私と近藤さんが測量したものだが、測量する地先の笹を、母がひとりで刈り払い、近藤さんを驚かしたものだ。

測量は長いタル木を横にして、その上に水平器を乗せて測り出し、これで結構水路を作ることができたのだ。

こうして苦労した水田は、豊作の年は反5俵以上穫れ、私の処では、3町3反の水田から昭和5年には、150俵、昭和8年には130俵の収穫があったが、その他の年は凶作が続き、昭和10年から畑に還元して終わった。

長い上藻の生活の中で、米作りは、忘れられない思い出の一つである。